

(様式1)

「未来の担い手育成プログラム研究指定校」実績報告書(1年次)

1 学校名等

学 校 名	京丹後市立丹後中学校				校長名	日野 竹夫
研 究 主 題	「課題解決型の学習」をとおして、生徒の自己肯定感を高め、目的意識を持ち、未来を拓く力をつける。					
研究の目的	よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、予測困難な時代に対応することができる「未来の担い手の育成」のための教育活動の充実を図る。					
学 年	1年	2年	3年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	2	2	2	1	7	21
生 徒 数	44	37	40	4	125	

2 研究校の概要(生徒の実態、学力状況(分析)、研究体制等)

(1) 生徒の実態

与えられた課題に素直に取り組めるが、自信がないため意欲や粘り強さに弱さがあり、自分らしさを発揮しきれない生徒は少なくない。受け身な態度から脱却し、主体的に課題に向き合い、目的意識を持たせ、自分の力を発揮できる環境(PBLをとおした学習環境)の中で、やればできるという実感とともに、「正解のない問い」の最適解に向かう思考力・判断力を身に付けさせていく必要がある。

(2) 研究体制等

ア 体制

校長 — 教頭 — 研究主任(教務主任) — 学年主任 — 各学年担任・副担任

イ 役割

(ア) 校長…研究推進統括、指導助言

(イ) 教頭…研究推進管理、運営責任者

(ウ) 教務主任、研究主任…基本方針の推進、企画、実践の中核

(エ) 担任、副担任…生徒指導、授業実践

3 主な研究活動(時期や内容等)

(1) 教職員の研修

ア 1学期

(ア) PBL課題解決型の学習講座(センター研修)への参加及び研修内容の波及

(イ) 校内研修の実施(講師:京都府教育委員会指導主事、キャリア教育コーディネーター)

イ 2学期

府内研究指定校(亀岡市立亀岡中学校)への視察及び内容の波及

ウ その他

府内研究指定校のネットワーク構築及び進捗状況の交流

(2) 生徒の活動

時期	活動内容
7月	PBLオリエンテーション（課題意識をもたせる）
9月	<p>①丹後王国ブルワリー訪問 「中川社長の講話」及び「観光・環境・農業・食の専門家からの講話」</p>  <p>※施設見学及び講話にて設定された問いに対するアプローチのヒントを得た。</p> <p>②総合的な学習の時間にて情報収集及び課題分析</p>
10月	<p>①総合的な学習の時間にて課題分析</p> <p>②丹後王国にて職場体験及び仮説構築</p>  <p>※職場体験をとおして丹後王国について学び、実体験を生かした仮説構築へつなげた。</p> <p>③海岸清掃活動（拾ってつなぐ丹後の海） ※丹後の海の状態を知り、ボランティア活動をとおして課題を見出した。</p> <p>④総合的な学習の時間にて発表準備</p>
11月	<p>①学習発表会（PBL中間発表）</p>  <p>※中間発表の位置付けとして、各グループが全校生徒及び地域へ発表した。 ※中川社長からアドバイスをいただいて改善の方策を図った。</p> <p>②総合的な学習の時間にて仮説の再構築及び最終発表準備</p>
12月	<p>校内選考会 ※中間発表を経て再調整した内容をもとに、各グループの発表を実施し、校内10グループの中から最終3グループを選出した。</p>
1月	きょうと明日へのチャレンジコンテスト参加に向けた最終調整
2月	<p>きょうと明日へのチャレンジコンテスト参加</p>  <p>※今年度のPBLのまとめとして府内各校と共にコンテストに参加し発表した。 ※他校との交流の中で視野を広げると共に、探究活動の振り返りを行った。</p>

#### 4 今年度の研究の成果と検証（生徒、教職員、学校、家庭・地域社会の変容等）

##### (1) 教職員

ア 年度当初に「未来の担い手育成プログラム」のねらいやPBLについての研修を行うことで、今後の研究イメージを教職員全体で共有することができた。

イ 本校の従来の総合的な学習の時間の年間計画をもとに、研究のねらいに即した計画の改善を行うことで、効果的な指導の流れを構築することができたため、1年次の成果をもとに2年次へ円滑につなげたい。

##### (2) 生徒

ア 丹後王国ブルワリー中川社長の御支援により、丹後地域で御活躍されている各分野の専門の方々からの講話により、活動されている方々の思いを知ることで、探究活動の課題提起とすることができた。

イ 課題の設定、情報収集、仮説の構築、プレゼンテーション資料の作成など、生徒が主体となり、グループで協力して取り組むことにより、コミュニケーション能力の育成につながっている。

##### (3) 家庭・地域社会の変容

学習発表会等では、参観に来ていただいた方に、中学生が地域に対してどのようなことを課題として考え、どのようにアプローチしようとしているのかを理解していただく機会となった。参観者から、発表内容を地域にも広めたいとの提案があり、地域の会議等で中学生の取組を紹介していただいた。

#### 5 今年度の課題

##### (1) 教職員

ア 研究の中心となる第2学年については、計画・取組の過程の中でPDCAサイクルにより充実したものとなったが、他学年への波及については弱さが残った。

イ 1年次はPBLの取組を「総合的な学習の時間」を中心として展開することに留まった。授業改善をねらいとして、様々な教科・領域でPBLの手法を取り入れ、推進していく必要がある。

##### (2) 生徒

ア 探究活動をとおして一定の力を身に付けてきているが、どのように相手に伝えるのか、どうすれば相手に伝わるのかなどの発信力・表現力に課題が残った。この課題は本研究の中だけで見出されたものではなく、生徒の実態にも記述したとおり、本校の継続した課題であり、今回の取組により改めて認識することとなった。

イ 探究活動を行う中で、根拠となるデータ等はインターネットを中心に情報収集しているが、生徒自らがアンケートをとるなどの主体的な情報収集活動に弱さが残った。また、目的に応じた情報収集とその情報に対する客観性のある分析による根拠を提示し発信する力を育成していく必要がある。（思考力・判断力の育成）

#### 6 2年次の研究構想

(1) 1年次の経験を活かし、1学期の早い段階から取組を開始することで、2学期の探究的な学習にゆとりをもたせ、生徒の想像力や企画力を発揮しやすい計画に改善していく。

(2) 生徒の課題（弱さ）である発信力・表現力については、認知能力と非認知能力を一体的には

ぐくむ視点から、その課題を全教職員で共有し、総合的な学習の時間はもとより、あらゆる教科・領域において表現力を育成していく機会を設定していく。

- (3) 今年度の研究の主体となった2年生については、PBLの経験をとおして学習意欲やスキルが醸成されてきていることをふまえ、本学年（新3年生）を突破口としてPBLの手法を生かした授業改善に取り組む。
- (4) 非認知能力については、保幼小中一貫教育（学園）の強みを活かし、本研究のねらいを学園に周知しながら、系統的にはぐくんでいく。
- (5) 地域への発信をより積極的に行い、地域の協力を得ることにより、生徒の探究的な学習が円滑に進むよう環境づくりに努める。